

足下からはじめよう

宮津昭彦

永野萌生に、「類句巡禮」(「濱」昭24・2)「続類句巡禮」(「濱」昭24・3)がある。

氏は、俳句は短い詩型だから類句の生まれるのは止むを得ないし、類句類想をおそれていては自由な俳句活動が出来なくなるとしながらも、類句の存在が無批判に放置されていてよいわけではないとした。

ひとくちに類句といっても、その様相はさまざまである。氏は、作品価値に兄弟をつけがたい場合は、作句年代を考証して先行した作品が残されるべきだとする。たとえば、

げんげ田や昼は遺影が家を守る
麦は穂に遺影一葉家を守る

鵬ほう于う 斌雄

は、鵬于の句が先行するので鵬于の句を残すべしとする。作句年代の考証という厄介な仕事があるが、大方の類句はこれによって整理がつくのではないかと私は考え

る。

作品価値に怪題の存する場合は、むしろ、すぐれているほうの句が残る。

鷹の羽をひろひて持てば風集ふ
鷹の羽をひろひて立てば巖むなし

誓子 鶏二

を例としてあげている。これも納得できよう。句会などで、これは類句があるから駄目だ、というような場合は、この例が多いのではないかと思われる。

氏はさらに、先人に似たような句があっても、先蹤を抜いていれば認められるとしてつぎのような例をあげている。

大川や人流されて泳ぎけり
潮蒼く人流れじと泳ぎけり

子規 普羅

そして、「流れじ」が「流され」を一步抜いて普羅の代表句になっているとしているが、ことは見方を逆にし

たというだけのことではないであろう。おそらく普羅の念頭には子規の句はなかったであろうし、潮流を力の限り乗り切って行く泳ぎ手を目前にしての感激がこの句を生まされたのであって、そこに直情が屹立するような普羅の秀作が生まれたのである。

このことから、自らの感動に徹して作句して行くことが、類句類想のそしりをしりぞける上で何より大事なことでだといえるであろう。俳句を作るのではない、自分の俳句を作るのだと覚悟することがまず大事なのではないだろうか。短い詩型のなかで、万人が共用する季語を用いながら、類句類想を寄せつけない多くのすぐれた句が、俳句の世界をゆたかなものにしてきたのは、それぞれ作家が、内からの要請にしたがって、独自の境地を打ち立ててきたからにはかならない。つまり、誰のものでもない自分の俳句をそれぞれが作ってきたからなのである。

しかし、数多くの句を作って行くなかで、ほかの人の句に似た句が出来ることはある。吟行や鍛練会のように、おなじ行程を歩き、おなじ風物に触れて作っているような場合である。

前出の「類句巡禮」には、次のような例もあげられている。昭和十五年、水原秋桜子が石橋辰之助をとまな

て乗鞍岳に登ったとき、示し合った作品にたまたま次のような句があった。

白日の夏爐は天にちかく焚く
夏爐焚きこよひは天にちかくねむる

辰之助 秋桜子

秋桜子は、ほんの少しの時間だけれど、辰之助の作が先んじていることを認めて、この句を句帖より抹殺したという。いさぎよい話である。他人の類句類想を指摘するなら、一方に、自分の句については、こうしたいさぎよさを持っていることが必要であろう。

さて、類句類想は、おおむね他人の句との比較において論じられることが多い。それはそれでよいのだが、もっと切実に必要なのは、自分の作品の系列のなかでの類句類想のチェックである。

芭蕉は、「昨日の我に飽きる」ことを説いた。昨日作ったような句は作らない、去年作ったような句は作らない、前の句集に収めたような句は作らない——絶えず自分にそう言い聞かせていることが必要であろう。新しさは外に題材を求めることにとどまるものではない。新しさは自分の内から掘り起してくるものである。それはむずかしいことではあるが、俳句を作っている以上、努めなくてはならないことなのである。類句類想を避けるのは、まず足下からはじめようというべきであろう。